

## ハンカチノキ

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

今まで花期を想定して寄稿したことはないが、今回のハンカチノキはこの号が出るころには、ちょうどハンカチノキの花期に間に合い、この植物に関心のある方にも役立つこともあるかと思う。今回はハンカチノキの存在は結構認知を受けるようになってきているので、申すと意外に思われることの多いハンカチノキとパンダが深くかかわっていることについて述べてから、ハンカチノキに触れたいと思う。

## ハンカチノキとパンダ

ハンカチノキもパンダも、実は今から150余年前に同じ人により発見されたが、その人とはフランスのカトリック教団のダビド (Armand David) 神父で、ちょうど明治維新のころである。ダビド神父はフランス南西部のピレネー山地の出身で、神父になるための宗教教育はイタリアで受けたが、そこで同時に博物学の研修も受けた。そして、アヘン戦争に続く太平天国の乱の後で、清朝がちょっとだけ外国に門戸を開いたときに、彼は宣教のために中国に赴いた。第1回目の訪問は1883年に始まるものであったが、北京の皇帝の園地で不思議な動物を見て、その毛皮をフランスに送ったことで注目された。それは、今や野生では絶滅したシフゾウ (四不像) であった。これで博物学者としての評価を得た彼は、第2回目の中国訪問ではフランス国立自然史博物館の援助を受けることもできた。1887年のその訪問では、まず北京へ行き、そこから天津へ出て、水路経由で上海へ行き、揚子江を遡ること2000kmで四川省の省都成都に達した。そこからさらに山地へ入り、その当時でも創設されてから30年でしかなかった鄧池溝 (とうちこう) カトリック教会に達した。そこでダビド神父は獵師に白黒マダラの毛皮を見せられたが、それがパンダの発見であった。それで、彼は獵師にはこのような珍しい毛皮が入手できれば対価を払うといい、また、自身でも山地へ危険を冒して入ったが、果たして命の危険に遭遇するような目にあつた。最初にもたらされたものは新種のイノシシであったが、その次にもたらされたのがパンダの遺体であり、その毛皮と骨格標本はフランスへ送られて、

当初はクマの一種 (*Ursus* sp.) として彼自ら命名したが、後に独立のグループとされ、学名も *Ailuropoda melanoleuca* となった。意味としては白黒のレッサーパンダと言えよう。なお、パンダの発見については詳しい紹介がある

るので、ここではそれらに譲る (ニコルズ 2014)。その頃、ダビド神父はハンカチノキも発見しているのである。つまり、パンダもハンカチノキも成育地は重複していることになるが、パンダの方が狭いことは容易に想像ができよう。現生地を訪問された邑田 仁博士より、そこで撮影されたハンカチノキの写真を提供いただいた (図-1)。そして、それには学名 *Davidia involucrata* が与えられたが、彼の名前をつけた新属が立てられたことに、人々がいかに驚いたかが示されている。なお、学名に彼の名前にちなんでいるものがあることは、シフゾウ (*Elaphrus davidiana*) 他に見られるが、彼の博物学への貢献は大変大きい。

## ハンカチノキ

ハンカチノキは日本各地の植物園で知られているようになっているが、東京大学小石川植物園のハンカチノキはもたらされて50年余になり、アメリカ、ミズーリ植物園から導入された。4月半ばから5月中旬にかけて、植物園の訪問者

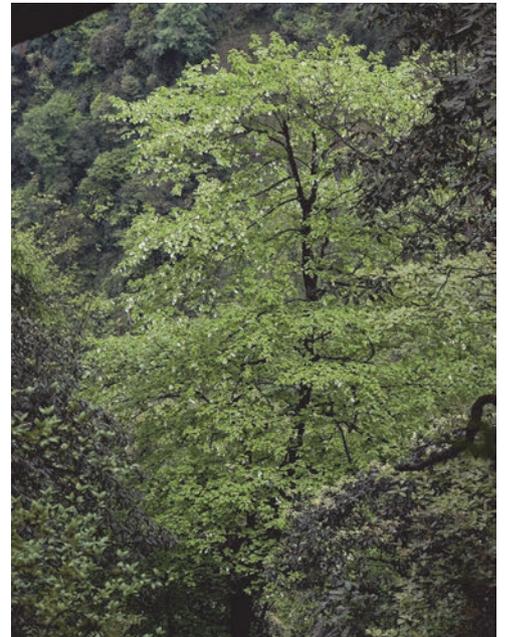


図-1 原生地峨眉山のハンカチノキ



図-2 小石川植物園のハンカチノキ



図-3 日光植物園のハンカチノキ



図-4 ハンカチノキの種子

のほとんどは園の中央にあるこの樹に集まるので、その場所は容易にわかるであろう。図-2に示すように、花序からハンカチ状のものがヒラヒラと下がり、時期が進むとそれぞれハンカチのように垂れてくる。しかし、これは花卉ではなく、花序を対で包む、苞と呼ばれている器官である。早い時期には雄花で落ちているものもあるが、両性花で落ちているものも見られる。植物のグループとしては、ミズキ科、あるいはヌマミズキ科であり、わが国にはヤマボウシがこの仲間に近いが、この場合には白い花卉状の総苞が見られ、関東の山々でもその特徴的な姿が見られることは経験している。しかし、ハンカチノキの場合、苞が垂れ下がるということは極めて特徴的である。そして、時期をほぼ1か月遅くして、東京大学日光植物園の入り口を入ってすぐ右側の駐車場の脇に大きな木が聳えているが、これもハンカチノキであり、苞を垂れていよう(図-3)。従って、小石川植物園で見逃した人は、日光植物園へ行けば見ることができると申したい。そして、ハンカチノキはその後葉が繁るが、秋には落葉しトチの実状の果実がたわわに実る(図-4)。

ところで、2020年はコロナに明け暮れしており、2021年になってもその行方は未だ全く不透明な状況にあるが、筆者は2020年にはこの植物を通年観察することになった。遠出もなかったのも、毎日見ることができたということでもある。というのは、東京大学小石川植物園の園長を何度か経験することとなったが、その初期に当時の主任技官下園文雄さんから、園のバックヤードで繁殖用のハンカチノキの鉢が余分にあるので要るかと言われて、是と申しあげた。それから、約20余年して筆者宅の庭の一角に聳えるように育っている。そこで、特徴的なハンカチ状の苞ができるまでに約20年要することを自ら経験したが、十数年たった時にはいつ咲くのかと毎年気になった。そして、ハンカチ状の苞の垂れさがることを実際に見ることができたことは感動的であった。ただ、この樹は結構大きくなるので、かなりの場所をと

ることを申し添える。また、余り指摘されないことであるが、この木の葉も特徴的な形態を持っていることは秋になって落葉時に気付いた。植物の葉の多くは左右対称が多いが、この樹の葉は非対称であり、それがどのように形成されるかは大変興味がある。非対称の葉は、このほかにもセイヨウボダイジュ、シナノキなど多く知られているが、それらの形成の分子機構は研究対象としても今後の課題であろうが、転写因子の関与で説明されるのではと想像している。

我が家のハンカチノキが苞を下げるようになって3年になるが、毎日見ていると葉は樹の下方からついていき、ハンカチが下がる過程も見ることができた。2019年度までは雄性花が目立ったが、2020年は両性花も多く見られ、それらが時間をかけて下から上へと向かっていった。そして、やがて花期が終わり、葉が茂り、その葉が散り始めたのは10月後半で、12月の半ばにはほぼ葉を落とした。誰にも気づかれずにこのような観察ができたことは幸いであると思っている。

本稿を閉じるにあたり、ハンカチノキとパンダが四川省の奥地を原生地にしていることは、いずれも希少種である両種は氷河期が発達した時期に氷河から逃れることができたことを意味していると申したい。同様な理由ではイチョウも同じカテゴリーに入り、実際イチョウが残存できた場所も同地域であることは、これらの種の残存に特別な意味を持って言えることを示していよう。本稿の写真は全て東京大学名誉教授邑田仁博士より提供を受けたことを謝辞をもってここに記す。

## 文献

ニコルズ, H. 2014. パンダが来た道, 池村千秋訳, 白水社.